

烏瓜の花と蛾

寺田寅彦

青空文庫

今年は庭の烏からすうり 瓜ぼらがずいぶん勢いよく繁殖した。中庭の四ツよ
 目垣めがきの薔薇ばらにからみ、それから更に蔓つるを延ばして手近なさんごの
 樹を侵略し、いつの間にかとうとう樹冠の全部を占領した。それ
 でも飽き足らずに今度は垣の反対側の楓かえでのき 樹までも触手をのば
 してわたりを付けた。そうしてその蔓の端は茂った楓の大小の枝
 の間から糸のように長く垂れさがって、もう少しでその下の紅こうし
 蜀葵よつきの頭に届きそうである。この驚くべき征服慾は直径わずか
 に二、三ミリメートルくらいの細い茎を通じてどこまでもと空中
 に流れ出すのである。

毎日夥おびただしい花が咲いては落ちる。この花は昼間はみんな苔つぼんで

いる。それが小さな、可愛らしい、夏夜の妖フェアリー精にぎこぶしの握り拳しとでも云った恰好をしている。夕方太陽が没してもまだ空のあかりが強い間はこの拳は堅くしつかりと握りしめられているが、ちよつと眼を放していてやや薄暗くなりかけた頃に見ると、もうすべての花は一遍に開き切つていたのである。スイッチを入れると数十の電燈が一度に灯ともると同じように、この植物のどこかに不思議なスイッチがあつて、それが光の加減で自働的に作用して一度に花を開かせるのではないかと思われるようである。ある日の暮くれがた方、時計を手にして花の咲くのを待つていた。縁側で新聞が読めるか読めないかというくらいの明るさの時刻が開花時で、開き始めから開き終りまでの時間の長さは五分と十分の間にある。つ

まり、十分前には一つも開いていなかったのが十分後にはことごとく満開しているのである。実に驚くべき現象である。

烏瓜の花は「花の骸骨」とでも云った感じのするものである。遠くから見ると吉野紙よしのがみのようでもありまた一抹の煙のようでもある。手に取って見ると、白く柔らかく、少しの粘りと臭気のある繊維が、五葉の星形の弁の縁辺から放射し分岐して細かい網のように拡がっている。苔んでいるのを無理に指先でほごして開かせようとしても、この白い繊維は縮れ毛のように捲き縮んでいてなかなか思うようには延ばされない。強しいて延ばそうとすると千切ぎれがちである。それが、空の光の照明度がある限界値に達すると、多分細胞組織内の水圧の高くなるためであろう、螺旋状らせんの縮

みが伸びて、するすると一度にほごれ拡がるものと見える。それで烏瓜の花は、云わば一種の光度計フオートメーターのようなものである。人間が光度計を発明するよりもおそらく何万年前からこんなものが天然にあつたのである。

烏瓜の花が大方開き切ってしまう頃になると、どこからともなく、ほとんど一斉に沢山の蛾がが飛んで来てこの花をせせつて歩く。無線電話で召集でもされたかと思うように一時にあちらからもこちらからも飛んで来るのである。これもおそらく蛾が一種の光度計を所有しているためであろうが、それにしても何町何番地のどの家のどの部分に烏瓜の花が咲いているということを、前からちやんと承知しており、またそこまでの通路をあらかじめすつかり

研究しておいたかのように真一文字に飛んで来るのである。

初めて私の住居を尋ねて来る人は、たとえ真昼間でも、交番やら店屋などを聞き聞き何度もまごついて後にやっと尋ねあててくらしいものである。

この蛾は、戸外がすっかり暗くなつて後は座敷の電燈を狙いに来る。大きな烏瓜か夕顔の花とでも思うのかもしれない。たまたま来客でもあつて応接していると、肝心な話の途中でもなんでも一向会えしやく釈なしにいきなり飛込んで来て直ちに忙せわしく旋回運動を始めるのであるが、時には失礼にも来客の頭に顔に衝突し、そうしてせつかく接待のために出してある茶や菓子の上に箔はくの雪を降らせる。主客総立ちになつて奇妙な手付をして手に手に団扇うちわを

振廻わしてみてもなかなかこれが打落されない。テニスの上手な来客でもこの羽根の生えたボールでは少し見当が違うらしい。婦人の中には特にこの蛾をいやがりこわがる人が多いようである。今から三十五年の昔のことであるが或る田舎の退役軍人の家で大事の一人息子に才色兼備の嫁を貰った。ところが、その家の庭に咲き誇った夕顔をせせりに来る蛾の群が時々この芳紀二八にはちの花嫁をからかいに来る、その度たびに花嫁がたまぎるような悲鳴を上げてこわがるので、息子思いの父親はその次の年から断然夕顔の栽培を中止したという実例があるくらいである。この花嫁は実際夕顔の花のような感じのする女であつたが、それからわずか数年の後亡くなった。この花嫁の花婿であつたところの老学者の記憶には

夕顔の花と蛾とにまつわる美しくも悲しい夢幻の世界が残っている。そう云って彼は私に囁くのである。私には彼女がむしろ烏瓜の花のように果敢ない存在であつたように思われるのである。

大きな蛾の複眼に或る適当な角度で光を当てて見ると気味の悪いように赤い、燐光に類した光を発するのがある。何となく物凄い感じのするものである。昔西洋の雑誌小説で蛾のお化けの出るのを讀んだことがあるが、この眼玉の光には実際多少の妖怪味と云つたようなものを帯びている。つまり、何となく非現実的な色と光があるのである。これは多分複眼の多数のレンズの作用で丁度光り苔の場合と同じような反射をするせいと思われる。

蛾の襲撃で困つた時には宅の猫を連れて来ると、すぐに始末が

着く。二匹居るうちの黄色い方の痩せつぽちの男猫が、他には何の能もない代りに蛾をつかまえることだけに妙を得ている。飛上がったと思うと、もう一遍にはたき落す。それから散々玩具にした揚句あげくに、空腹だとむしゃむしゃと喰つてしまうのである。猫の神経の働きの速さと狙いの正確さには吾々人間は到底叶かなわない。猫が見たら人間のテニスやベースボールは定めて間だるつこくて滑稽なものだろうという気がするのである。それで、仮りに猫の十分の一秒が人間の一秒に相当すると、猫の寿命が八年ならば人間にとっては八十年に相当する勘定になる。どちらが長生きだかちよつと判らない。

これは書物で読んだことだが、
 檉かしどり鳥や山鳩やまぼとや山鳴やましぎのよう

な鳥類が目にも止まらぬような急速度で錯雑した樹枝の間を縫うて飛んで行くのに、決して一枚の木の葉にも翼を触れるような事はない。これは鳥の眼の調節の速さと、その視覚に応じて反射的に行われる羽翼の筋肉の機制の敏活を物語るものである。もし吾々人間にこの半分的能力があれば、銀座の四つ角で自動車電車の行き違う間を、巡査やシグナルの助けを借りずとも自由自在に通過することが出来るにちがいない。しかし人間にはシグナルがあり法律があり道徳があるために鳥獣の敏活さがなくても安心して生きて行かれる。そのために吾々はだんだんに鈍になり気永くなつてしまったのであろう。

しかし鳥獣を羨うらやんだ原始人の三つ子の心はいつまでも生き延び

て現代の文明人の社会にも活動している。蛾をはたき落す猫を羨み讚歎する心がベースボールのホームランヒットに喝采を送る。一片の麩ふを争う池の鯉の跳躍への憧憬がラグビー戦の観客を吸い寄せる原動力となるであろう。オリンピック競技では馬やかもしか羚羊や魚の妙技に肉薄しようという世界中の人間の努力の成果が展開されているのであろう。

機械的文明の発達は人間のこうした慾望の焰にガソリン油を注いだ。そのガソリンは、モーターに超高速度を与えて、自動車を走らせ、飛行機を飛ばせる。太平の夢はこれらのエンジンの騒音に攪かくらん乱されてしまったのである。

交通規則や国際間の盟約が履行されている間はまだまだ安心で

あろうが、そういうものが頼みにならない日がいっ何時来るかもしれない。その日が来るとこれらの機械的鳥獣の自由な活動が始まるであろう。

「太平洋爆撃隊」という映画が大変な人気を呼んだ。映画というものは、なんでも、吾々がしたくてたまらないが実際はなかなか容易に出来ないと思うような事をやって見せれば大衆の喝采を博するのだそうである。なるほどこの映画にもそういうところがある。一番面白いのは、三艘の大飛行船が船首を並べて断雲の間を飛行している、その上空に追い迫った一隊の爆撃機が急速なダイビングで礫つぶてのごとく落下して来て、飛行船の横腹と横腹との間の狭い空間を電光のごとくかすめては滝壺つばめの燕のごとく舞上がる

光景である。それがただ一艘ならばまだしも、数え切れぬほど沢山の飛行機が、あとからもあとからも飛び来り飛び去るのである。この光景の映写の間にこれと相錯あいさくそう綜して、それらの爆撃機自身に固定されたカメラから撮影された四辺の目まぐるしい光景が映出されるのである。この映画によつて吾々の祖先が数万年の間羨みつづけに羨んで来た望みが遂げられたのである。吾々は、この映画を見ることによつて、吾々自身が森の樹間をかける山鳩や椋鳥になつてしまふのである。

こういう飛行機の操縦をするいわゆる鳥人の神経は訓練によつて年とともに次第に発達するであろう。世界の人口の三分の一か五分の一かがことごとくこの鳥人になつてしまつたとしたら、こ

の世界は一体どうなるであろうか。

昔の日本人は前後左右に気を配る以外にはわずかに鳶とんびに油揚あぶらげを攫さらわれぬ用心だけしていればよかつたが、昭和七年の東京市民は米露の爆撃機に襲われたときに如何なる処置をとるべきかを真剣に講究しなければならぬことになってしまった。襲撃者は鳶以上であるのに爆撃される市民は芋虫以下に無抵抗である。

ある軍人の話によると、重爆撃機には一キロのテルミットを千箇搭載し得るそうである。それで、ただ一台だけが防禦の網をくぐつて市の上空をかけ廻つたとする。千箇の焼夷弾しょういだんの中で路面や広場に落ちたり河に落ちたりして無効になるものが仮りに半分だとすると五百箇所に火災が起る。これは勿論水をかけても消さ

れない火である。そこでもし十台飛んで来れば五千箇所の火災が突発するであろう。この火事を呆然として見ていれば全市は数時間火の海になる事は請合ひである。その際もしも全市民が協力して一生懸命に消火にかかったらどうなるか。市民二百万としてその五分の一だけが消火作業に何らかの方法で手を借し得ると仮定すると、四十万人の手で五千箇所の火事を引受けることになる。すなわち一箇所につき八十人宛あてということになる。さて、何の覚悟もない烏合うごうの衆の八十人ではおそらく一坪の物置の火事でも消す事は出来ないかもしれないが、しかし、もしも十分な知識と訓練を具備した八十人が、完全な統制の下に、それぞれ適当なる部署について、そうしてあらかじめ考究され練習された方式に従つ

て消火に従事することが出来れば、たとえ水道は止まってしまっても破壊消防の方法によって確実に延焼を防ぎ止めることが出来るであろうと思われる。

これは極めて大ざっぱな目の子勘定ではあるが、それでもおおよその桁けたすう数としてはむしろ最悪の場合を示すものではないかと思われる。

焼夷弾投下のために怪我をする人は何万人に一人くらいなものであろう。老ろうにやく若わかの外の市民は逃げたり隠れたりしてはいけないのである。空中襲撃の防禦は軍人だけではもう間に合わない。

もしも東京市民が慌てて遁げ出すか、あるいはあの大正十二年の関東震災の場合と同様に、火事は消防隊が消してくれるものと

思つて、手をつかねて見物していたとしたら、全市は数時間で完全に灰になることは確實である。昔の徳川時代の江戸町民は永い経験から割り出された賢明周到なる法令によつて非常時に処すべき道を明確に指示され、そうしてこれに関する訓練を十分に積んでいたのであるが、西洋文明の輸入以来、市民は次第に赤ん坊同様になつてしまつたのである。考えると可笑おかしなものである。

何箇月か何年か、ないしは何十年の後に、一度は敵国の飛行機が夏の夕暮れに鳥瓜の花に集まる蛾のように一時に飛んで来る日があるかもしれない。しかしこの大きな蛾をはたき落すにはうちの猫では間に合わない。高射砲など常識で考えても到底頼みになりそうもない品物である。何か空中へ莫大な蜘蛛くもの網のようなも

のを張つてこの蛾を喰い止める工夫は無いものかと考えてみる。あるいは花火のようなものに真綿の網のようなものを丸めて打ち上げ、それが空中でぱつと烏瓜の花のように開いてふわりと敵機を包みながらプロペラにしつかりとからみ付くというような工夫は出来ないかとも考えてみる。蜘蛛くものあんなに細い弱い糸の網で大きな蟬せみが捕られることから考えると、蚊帳かや一張りほどもない網で一台の飛行機が捕えられそうにも思われるが、実際はどうだか、ちよつと試験してみたいような気がするのである。

子供の時分に蜻蛉とんぼを捕るのに、細い糸の両端に豌えんどう豆大の小石を結び、それをひよいと空中へ投げ上げると、蜻蛉はその小石を多分餌えさだと思つて追っかけて来る。すると糸がうまい工合に虫の

からだに巻き付いて、そうして石の重みで落下して来る。あれも参考になりそうである。つまりピアノ線の両端に重錘おもりをつけたよ
うなものを矢鱈やたらと空中に打ち上げれば襲撃飛行機隊は多少の迷惑
を感じそうな気がする。少なくとも爆弾よりも安価でしかも却って
有効かもしれない。

戦争のないうちは吾々は文明人であるが、戦争が始まるとたち
まちにして吾々は野蛮人になり、獣になり鳥になり魚になり、ま
た昆虫になるのである。機械文明が発達するほど一層そうなるか
ら妙である。それで吾々はこれらの動物を師匠にする必要が起つ
て来るのである。潜航艇のペリスコープは比良目ひらめの眼玉の真似で
ある。海翻車ひとでの歩行は何となくタンクを想い出させる。ガスマス

クを付けた人間の顔は穀象こくぞうか何かに似ている。今後の戦争科学者はありとあらゆる動物の習性を研究するのが急務ではないかという気がして来る。

光の加減で烏瓜の花が一度に開くように、赤外光線でも送ると一度に爆薬が破裂するような仕掛も考えられる。鳳仙花ほうせんかの実が一定時間の後に独りではじける。あれと似たような武器も考えられるのである。しかし真似したくてもこれら植物の機巧はなかなか六かしくてよく分らない。人間の智慧はこんな些細ささいな植物にも及ばないのである。植物が見ても人間ほど愚鈍なものはないと思われるであろう。

秋になると上野に絵の展覧会が始まる。日本画の部にはいつで

も、きまつて、色々の植物を主題にした大作が多数に出陳される。ところが描かれている植物の種類が大抵きまり切つていて、誰も描かない植物は決して誰も描かない。例えば烏瓜の花の絵などついぞ見た覚えがない。この間の晩、床に這入つてから、試みに宅の敷地内にある、花の咲く植物の数を数えてみた。二、三十もあるかと思つて数えてみたら、實際は九十余种あつた。しかし帝展の絵に現われる花の種類は、まだ数えてみないが、おそらくずつと少なそうである。

数の少ないのはいいとしても、花らしい花の絵の少ないのにも驚歎させられる。多くの画家は花というものの意味がまるで分らないのではないかという失礼千萬な疑いが起るくらいである。花

というものは植物の枝に偶然に気紛れにくつついている紙片や糸層のようなものでは決してない。吾々人間の浅墓あさはかな智慧などでは到底いつまでたつても究め尽せないほど不思議な真言しんごん秘密の小宇宙なのである。それが、どうしても情ない、紙細工のようなものにしか描き現わされないであろう。それにしても、ずっと昔私はどこかで僧心しんえつ越この描いた墨絵の芙蓉ふようの小軸を見た記憶がある。暁天の白露を帯びたこの花の本当の生きた姿が実に言葉通り紙面に躍動していたのである。

今年の二科会の洋画展覧会を見ても「天然」を描いた絵はほとんど見付からなかった。昔の絵描きは自然や人間の天然の姿を洞察することにおいて常人の水準以上に卓越することを理想として

いたらしく見える。そうして得た洞察の成果を最も卑近な最も分りやすい方法によつて表現したように思われる。然るにこの頃の多数の新進画家は、もう天然などは見なくてもよい、か、あるいはむしろ可成的なるべくの見ないことにして、あらゆる素人よりも一層皮相的に見た物の姿をかりて、最も浅薄なイデオロギーを、しかも観者にはなるべく分りにくい形に表現することによつて、何かしら大したものがあるにありそうに見せようとしている、のではないかと疑われても仕方のないような仕事をしているのである。これは天然の深さと広さを忘れて人間の私を買いかぶり思い上がった浅墓な慢心の現われた結果であらう。今年の二科会では特にひどくそういう気がして私にはとても不愉快であった。尤もその日は

特に蒸暑かつたのに、ああいう、設計者が通風を忘れてこしらえた美術館であるためにそれが更に一層蒸暑く、その暑いための不愉快さが戸惑いをして壁面の絵の方に打ぶつかって行つたせいもあるであろう。実際二科院展の開会日に蒸暑くなかつたという記憶のないのは不思議である。大正十二年の開会日は朝ひどい驟しゅう雨があつて、それが晴れると蒸暑くなつて、竹の台の二科会場で一時五十八分の地震に出遇つたのであつた。そうして宅へ歸つたら瓦が二、三枚落ちて壁土が少しこぼれていたが、庭の葉は鶉げいとう頭はおよそ天下に何事もなかつたように真紅しんくの葉を紺碧こんぺきの空の光の下に耀かがやかしていたことであつた。しかしその時刻にはもうあの恐ろしい前代ぜんだい未聞みもんの火事の渦巻が下町一帯に拡がりつつあつた。

そうして生きながら焼かれる人々の叫喚きょうかんの声が念仏や題目の
 声に和してこの世の地獄を現わしつつある間に、山の手では烏瓜
 の花が薄暮の垣根に咲き揃っていつもの蛾の群はいつものように
 忙せわしく蜜をせせっているのであった。

地震があれば壊れるような家を建てて住まっていれば地震の時
 に毀こわれるのは当り前である。しかもその家が、火事を起し蔓延さ
 せるに最適な燃料で出来ていて、その中に火種を用意してある
 のだから、これは初めから地震に因る火災の製造器械を据付けて
 待っているようなものである。大火が起れば旋つむじ風かぜを誘致して
 焰の海となるべきはずの広場に集まっていれば焼け死ぬのも当然
 であった。これは事のあつた後に思うことであるが、吾々には明

日の可能性は勿論、必然性さえも問題にならない。

動物や植物には百千年の未来の可能性に備える準備が出来たのであるが、途中から人間という不都合な物が飛び出して来たために時々違算を生じる。人間が燈火を発明したためにこれに化かされて蛾の生命が脅かされるようになった。人間が脆ぜいじゃく弱な垣根などを作ったために烏瓜の安定も保証されなくなってしまう。凶に乗った人間は網や鉄砲やあらゆる機械を工夫しては鳥獣魚虫の種を絶やそうとしている。因果はめぐって人間は人間を殺そうとするのである。

戦争でなくても、汽車、自動車、飛行機はみんな殺人機械である。

この頃も毎日のように飛行機が墜落する。不思議なことには外国から遠来の飛行機が霞ヶ浦へ着くという日にはきまつて日本のどこかで飛行機が墜落することになっているような気がする。遠来の客へのコンプリメントでもあるかのように。

とんぼからす蜻蛉や鴉が飛行中に機関の故障を起して墜落するという話は聞

かない。飛行機は故障を起しやすいように出来ているから、それで故障を起すし、鳥や虫は決して故障の起らぬように出来ているから故障が起らなくても何も不思議はない訳である。むしろ、一番不思議なことは落ちるときに上の方へ落ちないで必ず下に落ちることである。物理学者に聞けば、それは地球の引力によるという。もつと詳しく聞くと、すぐに数式を持ち出して説明する。そ

んならその引力はどうして起るかと聞くと事柄は一層六むっかしくな
って結局到底満足な返答は得られない。実は学者にも分らないの
である。

吾々が存在の光栄を有する二十世紀の前半は、事によると、あ
らゆる時代のうちで人間が一番思い上がって吾々の主人であり父
母であるところの天然というものを馬鹿にしているつもりで、本
当は最も多く天然に馬鹿にされている時代かもしれないと思われ
る。科学がほんの少しばかり成長して丁度生意氣なまいきぎ盛りの年頃にな
っているものと思われる。天然の玄関をちらと覗いただけで、も
うことごとく天然を征服した気持ちになっているようである。科学
者は落着いて自然を見もしないで長たらしい数式を並べ、画家は

ろくに自然を見もしないで徒いたずらに汚らしい絵具を塗り、思想家は周
囲の人間すらよくも見ないで独りぎめのイデオロギーを展開し、
そうして大衆は自分の皮膚の色も見ないでこれに雷同し、そうし
て横文字のお題目を唱えている。しかもう一步科学が進めば事
情はおそらく一変するであろう。その時には吾々はもう少し謙けんそ
遜んな心持で自然と人間を熟視し、そうして本気で真面目に落着
いて自然と人間から物を教わる気になるであろう。そうなれば現
在の色々なイズムの名によって呼ばれる盲目なるファナチズム
の嵐は収まって本当に科学的なユートピアの真しん如によの月を眺める
宵が来るかもしれない。

ソロモンの栄華も一輪の百合の花に及ばないという古い言葉が、

今の自分には以前とは少しばかりちがった意味に聞き取られるのである。

(昭和七年十月『中央公論』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第七卷」岩波書店

1997（平成9）年6月5日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：Nana ohbe

校正：noriko saito

2004年12月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

烏瓜の花と蛾

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>